

大韓民国赤十字社京畿道支社を訪問

埼玉安全赤十字奉仕団 田村 起一



平成25年11月21日から24日までの4日間、大韓民国赤十字社^{キョンキドウ}京畿道支社を7名の奉仕団員と2名の支部職員で親善訪問いたしました。

初日に訪問した京畿道支社では、おもてなしの心で温かく迎えていただき、康孝正 (KanHyo Jung) 事務局長様や総務部長様から親切、丁寧に、支社の組織、事業及び内容等について説明いただきました。続いて、支社内にある血液センターの視察をしました。特殊な血液型が不足した時には、日本から支援を受けることもあるそうです。

2日目はボランティアセンターで、韓国の奉仕団員と一緒にアンパンを作りました。焼き上がったパンは、韓国赤十字社の新しいボランティア普及のためのマークである

「希望の風車」印の袋に詰め、肢体不自由の子供達のいる施設に持参し、素晴らしい交流を図ることが出来ました。

支社に戻り、心肺蘇生とAEDの講習を見学しました。日本との違いはあるものの、ボランティア指導員と受講者が共に熱心に取り組んでおり、大変参考になりました。

最終日は、1992年に日本赤十字社の支援により建設された、仁川サハリン福祉センターを訪問しました。現在、この施設には、サハリンから帰国された男性7名と女性69名が入居しており、平均年齢は86歳と高齢で、高齢者特有の病にかかっている方が多いそうです。

入居者の多くが日本語を話すことができるので、プレゼントを渡したり、折り紙で鶴等を折ったり、手を握ったりしながら、昔のことやサハリンに住んでいる家族や趣味について笑顔で話し、楽しいひとときを過ごしました。その後、一緒に日本の童謡などを大きな声で3曲歌いました。子供の頃を思い出し、懐かしく、楽しかったと話しておりました。

この度の訪問で、京畿道支社の皆様をはじめ、出会えた多くの方々と、お互いに理解し、親善を深めることができ、大変有意義な交流を図ることができました。



消防と日赤の連携強化を目指して — 平成25年度支部災害救護訓練実施 —

万一の災害に備え、今年も、去る11月16日(土)に、日本赤十字社埼玉県支部管内の施設合同の災害救護訓練を小川町にある比企広域消防本部小川消防署と小川赤十字病院を会場に行いました。

消防の救出救助活動と赤十字の医療救護活動との連携・協働体制の強化が狙いである本訓練は、小川消防署職員の全面的な参加協力のほか、県内の赤十字病院の医療救護班4個班をはじめ、約250人が訓練に参加しました。

小川町内の踏切において、列車とトレーラーの接触により、1両目が横転、2両目が脱線し、多数の傷病者が発生したという想定で、消防による救出救助によりトリアージポストに搬送されてくる多数の傷病者は、医療救護班が処置の優先順位を決めるトリアージにより、カテゴリー別の処置エリアに運び込まれました。

処置エリアのうち、ドーム型の大型エアテントでは、重症(最優先治療群)、中等症(待機的治療群)の両カテゴリーを受け持った医師、看護師らが、獅子奮迅の働きで傷病者の安定化を図り、主事は、医療統括を配した現地調整本部や搬送に伴う消防職員と緊密な情報伝達を行い、連携を図りました。

また、小川町赤十字奉仕団、日赤小川町分区分は、炊き出し訓練で非常食を作り、参加者の方々に配ったほか、看護学生とともに、傷病者役になり、想定に基づく迫真の演技をされたほか、埼玉県赤十字災害救援奉仕団や埼玉安全赤十字奉仕団が、救護班の支援として、軽症者の応急手当や担架搬送等を行い、日頃の団活動の成果を披露しました。

近年の多様化する災害では、他機関との連携が必要不可欠であり、その重要性をあらためて認識することのできた訓練となりました。



救護訓練の様子



トリアージする看護師